

国立民族学博物館の収蔵品⑬

韓国人観覧者の視点から学んだマトリックス展示法



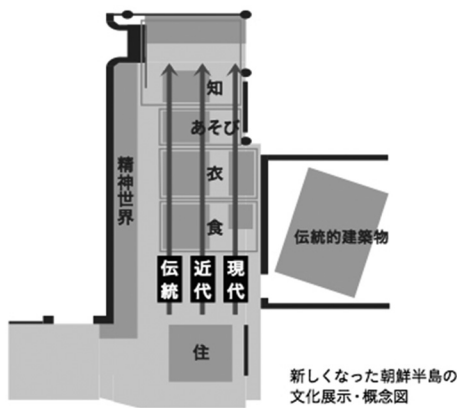
現在の国立民族学博物館「朝鮮半島の文化」展示（部分）

国立民族学博物館では、常設展示のすべてを新構築するという事業を、二〇〇八年度から行ってきた。本館の常設展示を一八のゾーンに分けて、毎年度二ないし四ゾーンを冬季に改装し、いちど一般公開して反応を見たあと、二年後に同じゾーンを部分改装するという作業が続いてきた。

たとえば「朝鮮半島の文化」というゾーンは、二〇一三年度に新構築し、二〇一五年度に部分改装を終えた。ただ、他のゾーンと違う事情があった。このゾーンは、もとの展示が二〇〇〇年にリニューアル・オープンしたばかりで、他のゾーンに比べ改装の余地が少なかったのだ。そこで生じた余力を、新構築チームは有効活用することにした。

展示を新構築する際、現状の問題点を認識することは必須で、そのため館内外の批判や一般観覧者の感想に寄り添うというものは欠かさない。われわれはそこに余力を投入し、徹底させた。

観覧者アンケートを読み込むのももちろん、研究者や学生などのグループを呼んで正直な批評を求めた。さ



セクション分けと時代区分が交差するマトリックス展示法の平面概念図

「遊びしかないお気楽な国なんだったら、私たちの苦労は何なの？」とまで皮肉っていた。

もちろん、韓国人からは他にも多様な意見をもらった。だが、この二点が今回の新構築の重要な方針となった。文化の展示が対象地域に対する誤解を生むことを極力避けるのは、博物館展示学の「いろは」だろうが、これらは特に酷い誤解を生む問題点だと考えられたからだ。悩みの種は展示場の狭さと形状。ウナギの寝床のような空間で、時代区分を明確にしつつ、勉学や競争の精神に関するセクションも増やすというのは、至難の業だった。多くの協力者の助言をえて、知恵を絞った結果が、新しい朝鮮半島展示の構成だ。縦に各セクションを配置し、展示物の時代は横の列で分けた。基盤の目的のように行と列がある。これなら、セクションごとに観るだけでなく、時代ごとにも観てもらえる。伝統的な展示物を観たければ左の列を、現代的なものに興味があれば右の列をとという具合だ。この展示構成は「マトリックス展示法」と名づけられた。今回の新構築は、この展示法の創造にもなった。

(太田心平)

らに、展示場にいた一般来館者に声がけして、問題点をあぶり出した。特に気を配ったのは、韓国人の観覧者からも意見を募ることである。わざわざ韓国人を選んで声がけするのは、前代未聞だった。だが、新鮮な発見はそこから多く得られた。たとえば、二十世紀初頭に収集されたキムチ入れと、近年に収集されたキムチ用の冷蔵庫が並んでいる前で、ある韓国人男性は不満そうにしていた。「これだと、こんな昔の物も、今でも一緒に使っているみたいじゃないか！」

「遊びのセクションがあるのに、仕事や勉強のがない」という不満もあった。朝鮮半島の人びとは、芸能に秀でた民族という言われ方がある。かつ気分転換のための歌舞や音楽を日常にうまく取り入れてきた。だから、文化人類学の朝鮮半島研究でも、それに関する研究が多い。よって、文化人類学の研究成果を展示する本館の朝鮮半島展示にも、芸能や遊びに関する展示セクションが、衣・食・住・宗教の各セクションと、同じ規模で設けられていた。それに対し、ある韓国人女性には